

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0005
東京都東大和市高木 3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up, TOHOKU!

2018年(平成30年)1月16日 火曜日

無料

第68号

毎月発行

発行 2018年(平成30年)1月16日 火曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、64歳、経営コンサルタント、趣味は、縄文文化研究、この2月に株式上場プロフェッショナルを養成し、IPOの経営者教育も行うスクール『IPOマスタースクール』を開校、校長就任



新年号企画 「東北アイデンティティ発掘」 【“東北先史時代学”の提唱】

「東北日本の旧石器を語る会・岩手大会」参加

昨年十二月半ば、岩手県遠野市において開催された「第31回 東北日本の旧石器を語る会 岩手大会」に、この分野の素人の筆者ながら図々しく参加した。国内外の前期旧石器時代の研究者たちが全国および



金取遺跡発掘の石器

近隣諸国から数多く参加する本格的なシンポジウムであったが、アマチュア愛好家も参加してよいということと、以前から金取遺跡に興味があった筆者は喜び勇んで参加した。メインイベントは二日目の公開シンポジウム「金取遺跡と東アジア前期旧石器」であった。

震災発生七年目の新年にあたって

東北の復興を支援する新聞の新年号トップ紙面で、唐突に前期旧石器時代を語りだし、また旧石器時代の石器写真がたくさん登場したことに戸惑いを感じられないので、少し言い訳をし

たいと思う。

あの震災から今年の三月十一日で満七年を迎えるにあたって、一年経つたびに反復される定型のご挨拶ではなく、もう一度、震災発生直後に立ち返って、目指すべき被災地復興の形を再確認したいと考えた上での、大胆な切り込み方であるとご理解いただきたい。

もうすぐ七年という長い時間が経過し、記憶の鮮明さも薄れはじめた今だからこそ、あのときに口々に言っていた、未曾有の大災害を乗り越えるための抜本的な復興の形を思い起こさねばならないと痛切に思う。

このまま流れのままに復旧作業を続けていたら、「周回遅れ」の復旧しか獲得できないだろう。もう一度、被災地復興の根本思想を練り直し、さらにそのベースとしての東北

復興の目指す方向を明確にすべきであると思う。

あらためて東北とは何かを問う

そこで、根本から考え直すための最もふさわしい原点中の原点まで遡ってみようという投げかけを行いたいのである。

被災地の復興、東北の復興とは何かと問われて、多くの関係者の合点がいく答えはまだ見つかっていないと筆者は考える。

いま、東北の近現代からの発想といっても、その歴史は勝者側の論理で塗り替えられているし、東北人は何かと問われても、「混血」と「流入」を重ねた挙句、純然たる東北人の名残も存在しないところで、そうしたアングルから満足できる回答など出せるわけがない。また東北文化といっても、

これだと言えるものも的確に指し示すことはできない。それほど純粋な形で東北文化が保持され、思想化されているわけではない。また、たとえ答えを出したとしても、東北各県の答えがばらばらでは、そもそも「東北とは？」という設問そのものがまちがいとなる。

こうした問いに対する答えを探しのために、いったいどこに確実に出発できる原点があるのか、そこから復興ビジョンを再構成する原点は存在しないのではないかと考えていた矢先、願ってもない原点候補が見つかったのである。

まさに唐突で、いきなりの大飛躍ではあるが、それは**東北前期旧石器時代**であるとの主張である。



第31回 東北日本の旧石器を語る会 岩手大会

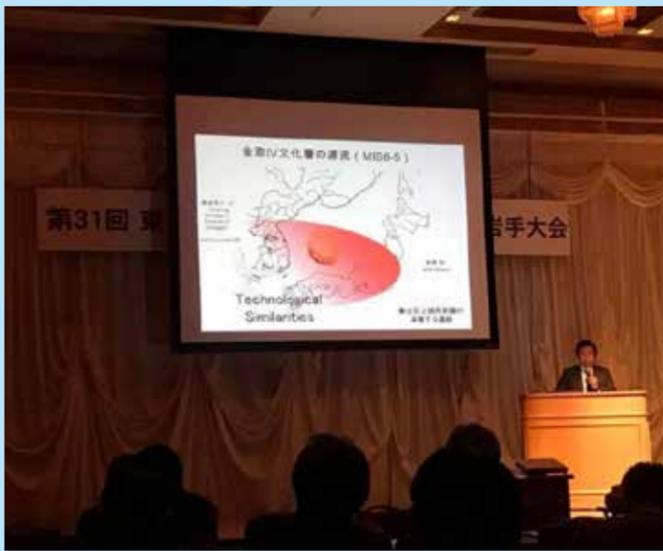
負け続けではない輝かしい時代を復興基盤に

筆者も、震災以来、東北の歴史についていろいろ考えてみた。

東北の歴史でまず思い浮かぶのが明治維新前夜である。しかし、あの時点から東北は負け続けている。ほぼあらゆる分野において、「白河以北一山百文」が念入りに浸透している。これを逐一フォローしていくと気が滅入るばかりである。

また、江戸時代も恵まれてはいない。中央に搾取され、負け続け、必死に耐える場面だけが繰り返している。さらに時代を遡っても、平安初期の大和政権による侵略以来、東北はずっと負け続けているのだ。

その負け続けの歴史を、東北復興ビジョンの基盤に



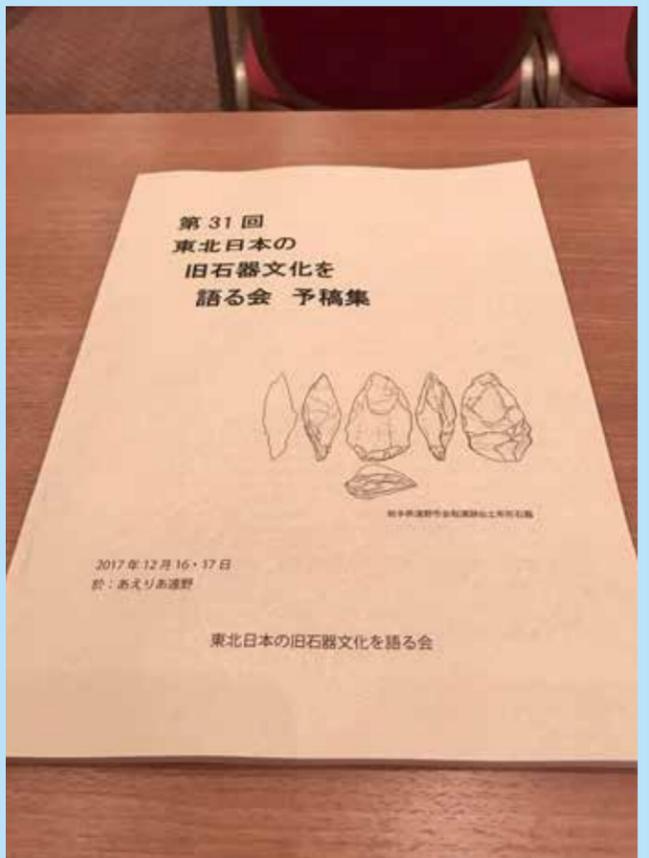
金取遺跡研究発表のひとこま ①

据えるわけにはいかない。東北の復興にあたっては、既存の負け続けの路線をきっぱり遮断したのである。もっと輝かしい時代を探さなければならない。

でも東北に輝かしい時代はあったかと疑問に思われる方々もおられるかもしれないが、確かに存在した。そのためには、歴史をかなり遡る必要がある。

縄文時代ではなく前期旧石器時代開始の東北

縄文遺跡が東北に密集していることは周知の事実である。



金取遺跡研究発表資料

縄文時代は一万年以上も

の長きに亘って続いた世界でも稀有な時代であるが、その時代は、日本の人口が東日本に集中しており、なかでも東北に集中していた時期がある。

縄文時代は一万年以上も



金取遺跡研究発表のひとこま ②

縄文時代は一万年以上も

石器ねつ造事件を越えての金取遺跡

それにしても、このシンポジウムでも何度も言及された、あの有名な「旧石器ねつ造事件」の悪影響は計り知れない。そのせいで、日本の前期旧石器時代研究は大きく遅れた。

誕生させやすい。いわば、東北が当時の日本の先駆けを担っていたのである。しかし、その時代に先行する前期旧石器時代が存在し、有名な遺跡があることはあまり知られていない。それは岩手県遠野市宮守町の「金取遺跡」である。

悪影響はそれだけではなく、従来の定説を越える時代の発見や発掘成果を認めることにはどの研究者も超保守的になってしまった。科学的にほぼ確実と思われる成果にも疑問符をつけて、時代判定論議に及び腰になってしまったのだ。

東北の原点発掘活動：東北先史時代の提唱

しかし、東北復興は前期旧石器時代とは直接の関係はないのではないかと、批判も聞こえてきそうだが、復興ビジョン立案に関し

特にこの金取遺跡の年代測定にも大きく現れている。さまざまな角度からの検証作業により、どんなに低く見積もっても現在から八万年前の遺跡であるにもかかわらず、そう断言せず、あくまでも可能性があるとしか言わず、石器の年代判定にはもつと材料を集めなければならぬというのだ。

その結果、前期旧石器時代のかくも重要な遺跡や発掘物への注目度が低いままである。

この遺跡の重要性は、日本国内だけのものではない。当時の東アジアの人類の痕跡をトレースする意味でもかなり重要であり、さらには、アフリカを出てからの現生人類の足跡を調べるにも重要な側面を有している。それが、東北の岩手の遠野に存在しているのである。



陳列された旧石器時代石器 ②



陳列された旧石器時代石器 ①

て、巨大な自然災害対策を考える際にも、現代人の近視眼思考から離れてロングスパンの東北の歴史を語る

ときに、ここが原点であるとの認識を、少なくとも東北内で共有したいものだ。また、そこから東北が始まっただけでなく、日本が



陳列された旧石器時代石器 ④



陳列された旧石器時代石器 ③

始まったのであり、その後どうなっていたのかを、多くの研究家に研究してもらい、復興ビジョン策定に役立てて欲しい。

そして、被災地復興にも、東北復興にも、この原点を踏まえた観点を忘れないで欲しいと願う。

また、東北復興の基盤思想として位置付けて欲しい。最後に、「東北学」という東北地方の、文化、地理、歴史、経済的な学際的総合研究があるが、それとは別に、**【東北先史時代学】**を新年にあたり提唱したいと思う。



ほや飯



写楽

新年初の開催 第31回 三陸酒海鮮会 2018.2.3 渋谷焚火家

新年初の三陸酒海鮮会は、節分の日の二月三日に開催されます。この会は2013年四月を第一回として、次回で三十一回目を数え、足掛け六年に亘るロングランの三陸支援の会となっております。この間、開催場所の渋谷・焚火家のオーナーやスタッフの方々に支えられ、また数多くのご参加いただいた方々に支えられてここまでまいりました。今後も引き続き、この会の存続と三陸被災地復興支援のために、ぜひご支援のほどお願い申し上げます。



東北地酒ラインアップ



豪華なお刺身



第41回 水産業再興のための 料理レシピ紹介

豪華版サラダ 《白花豆と サーモン、 ルッコラ のサラダ》



郷土料理愛好家
松本由美子氏

【材料】 白花豆(乾燥)100g、スモークサーモン 4枚、玉ねぎ 1/4個、ルッコラ 1/2束、黒オリーブ(輪切り)15g **ドレッシング材料** 粉チーズ 大2、アンチョビ(たたき刻む)2枚、オリーブ油 大3、白ワインビネガー大1、塩 小1/4、コショウ、おろしニンニク

【作り方】

①白花豆は、40～50分茹でます。②玉ねぎは千切りにして、水に晒します。③ドレッシングは分量を合わせます。④サーモンは半分にカットします。⑤材料を合わせ、ドレッシングをかけて黒オリーブとルッコラを載せます。

白花豆にサーモンやオリーブの塩分が含まれます。とても豪華に見えるサラダです。(松本談)

写真でお伝えする

写真撮影：尾崎匠

東北の風景（正月と冬の山）



玉虫左太夫が見た夢

小説

「竜は動かさず奥羽越列藩同盟頼末(上下巻、上田秀人、講談社)は、幕末に活躍した仙台藩士、玉虫左太夫を描いた小説である。この歴史の谷間に埋もれてしまった玉虫左太夫という名前を、聞いたことはあるという人は仙台に住んでいる人の中には割と多いのではないかと思うが、彼が為した業績を言い表せる人はそれほど多くないのではないだろうか。

玉虫左太夫については、本紙第8号で早くも大川真氏が述べている。その中で氏は、「奥羽越列藩同盟の『集議』重視の政治システムは、明治維新の『敗者』

小説の中の玉虫左太夫

本書で描かれる玉虫左太夫は以下のような人物である。——仙台藩の下級武士で、学問を究めるために脱藩して江戸に出奔。苦勞を重ねるが、後に幕府直轄の教学機関である昌平坂学問所の長官となる林復齋に見出され、林の紹介で仙台藩の儒学者・大槻磐溪と邂逅し、大槻の推挙で仙台藩主伊達慶邦との目通しも叶う。林の推挙で堀織部正の従者として蝦夷地を視察し、条約の批准に渡米する外国奉

行新見豊前守の従者として太平洋を渡ってアメリカに上陸し、その後アフリカ、インドネシアを経由して世界一周して日本に帰国。その際に見聞きしたことの詳細な記録を『航米日録』としてまとめる。勝海舟や坂本龍馬と交流を持ち、松平春嶽や久坂玄瑞とも接触、仙台藩の命で風雲急を告げる京洛の動静を探る。大政奉還後、新政府から会津討伐を命ぜられるに際して、仙台藩を中心に旧幕府に匹敵する総石高260万石の奥羽越列藩同盟結成のために奔走、盟約づくりにも関与する。同盟崩壊、仙台藩降伏後、仙台藩の反佐幕派によって切腹させられる。

小説の中で玉虫左太夫は、「日本は忠義を志とし、礼節を重んじ、受けた恩を忘れぬ国でございます」と主張する。日本では手柄を立てて与えられた禄や庇護は代を重ねて子々孫々まで受け継いでいけるという保障があるおかげで、武士は安心して戦場に赴けたわけで、自分が討ち死にしても跡継ぎさえいれば家は残り、家族の生活は守られたのである。したがって、アメリカに対しては、「国をまとめた大統領といえども、次の入れ札で負ければ、ただの人に落ちる。本人でさえ、そうなのでござる。子や孫など一顧だにされませぬ。これでは忠義などありません」と最初は否定して見せる。

しかし、アメリカについては一方で、船上で艦長が一水夫の死を我が子を亡くしたように悲しむのを見て、「亜米利加が強いわけがわかりました。上の者と下の者が相和すれば人々の心は自(おの)ずから良き方向にまとまります。建国以来亜米利加で謀反がない理由もここにあるのでは」と、その情の深さに大いに感じ入っている。

また、元の身分が低いがために、事あるごとにあからさまな嫌がらせを受けたり、足を引っ張られたりしたために、「馬鹿が上にならないという点は、大いにうらやむことである」「血筋と生まれだけで、さしたる学もない連中が、重臣だど幅をきかせる」と嘆く。そうした中で孫ができたことで、「能力さえあれば、男女に変わらなく頭角を現せる世」であるアメリカの姿が玉虫左太夫の中で大きくなっていくのである。

玉虫左太夫はそうした中、奥羽越列藩同盟の軍務局議事広接頭取という外交官ともいうべき役割に就いた。奥羽越列藩同盟は会津、庄内への恩赦を要望する嘆願を出し、続いて盟約を作成する。盟約の全文は小説中には出てこないが、実際の盟約は以下の通りである。

盟約を以て公平正大の道を執り、同心協力、上王室を尊び、下人民を憐恤し、皇国を維持し、而して宸標を安んぜんとす。仍て条例左の如し。

一、天下の大義を伸べるを以て目的と為し、小節細行に拘泥すべからざる事。

一、海を渉る同舟の如く、信を以て居し義を以て動くべき事。

一、若し、不慮危急の事あらば、比隣各藩、速やかに援救し、総督府に報告すべきの事。

一、強きを負み弱きを凌ぐ勿れ、私に利を営む勿れ、機事を泄す勿れ、同盟を離する勿れ。

一、城堡を築造し、糧食を運搬する、止むを得ずと雖も、漫りに百姓をして勞役し、愁苦に勝えざらしむる勿れ。

一、大事件は列藩集議、公平の旨に帰すべし。細微は則ちその宜しきに随ふべき事。

一、他国に通謀し、或ひは隣境に出兵す、皆同盟に報ずべき事。

一、無辜を殺戮する勿れ、金穀を掠奪する勿れ、凡そ事不義に涉らば、厳刑を加ふべき事。

右条々、違背あるに於ては、則ち列藩集議し厳罰を加ふべき事なり

崇高な精神が現れた見事な盟約である。これらの中で、玉虫左太夫がその権限を使って入れ込んだものが

5番目の「やむをえずといえども、みだりに百姓を勞役させて憂い苦しませてはならない」という項目であった。東北の百姓を、アメリカで目の当たりにした奴隷にしてはならないという強い思いだった。

本紙第11号で紹介した小説「蒼茫の大地 滅ぶ」で、野上青森県知事は奥羽越列藩同盟の敗因として、「三春藩・河野広中の裏切りと農民の戦争拒否にあった」として、特に「何よりも農民の協力拒否が敗北につながった」と指摘していた。

しかし、奥羽越列藩同盟の側には、元々農民を戦争に巻き込まないための盟約が存在していたのである。小説中では逆に、勢いづいた会津藩がこの盟約を破って、白河領で密かに農民に食糧を抛り出させ、防衛陣を構築するための人夫も徴発するが、そのために農民の恨みを買って、新政府軍を手引きして間道を案内した結果、立石山の陣を奪われて形勢が不利になる様子が描かれている。

知られていない理由

白河の関に差し掛かった玉虫左太夫に、「ここを封じれば……奥州は独立できるか」との思いが脳裏をよぎる。奥羽越列藩同盟については前述の「蒼茫の大地 滅ぶ」でも説明されているが、元々会津、庄内両藩の恩赦を嘆願する同盟だった

絶された後は、北部政権の樹立を目指した軍事同盟となった。この新しい政権の樹立というのは、新政府とは別の政権を創るということで、いわば新政府からの独立を目指したとも言えるのだが、敗北したこともありこの辺りが過小評価されているのではないかと感じる。輪王寺宮公現法親王を推戴し、「東武皇帝」として即位し、改元も行ったという説もあるのだが、資料が乏しく、統一した見解が得られていない。

玉虫左太夫らが日本人として初めて世界一周した万延元年遣米使節も、あまり知られていないのではないだろうか。少なくとも、学校教育の中ではないわゆる「岩倉使節団」の方がはるかに著名である。玉虫左太夫自身のことあまりにも知られていない。

それは、これらはいずれも「敗者の歴史」であることが理由であるように思える。敗者の歴史は、勝者によって書き換えられるのが常である。とりわけ、新政府にとつては、自分たちとは別の政権が一次的にはあつても存在したという事実は、到底認められないものだったに違いない。

作者の上田秀人氏は、インタビューの中で、この小説を書いた理由について、「幕末は維新を興した側から語られることが多い。じゃあ私は違う方向から、あの時代を眺めてみよう」と考

えました」と答えている。視点を変えるとまったく違った歴史が見えてくる。この小説はそのまたない好例であろう。

もし玉虫左太夫が生きていたら

ところで、この小説のタイトル「竜は動かさず」の「竜」は何を表しているのだろうか。「竜」と言えば「独眼竜」政宗のことか、ま

ず思い浮かぶ。「竜は動かさず」はこの「独眼竜」政宗の築いた仙台藩が、結局戊辰戦争ではさしたる動きが

できなかったことを示しているのかもしれない。小説の中で仙台藩は、「かつて奥州に覇を執った仙台伊達も、二百六十年をこえる泰平に

戦を忘れていた。戦場で討ち死するかもしれないとの恐怖は、実戦経験のなきも加わって勝とうという強固な意思を奪った」と書かれている。奥羽を代表する大藩である仙台藩が、泰平にあぐらをかくことなく軍備や組織の近代化を図っていたとしたら、奥羽越列藩同盟はまた違った展開を見せていたのかもしれない。

あるいは、時代の変革を「竜」にたとえて、結局奥羽越列藩同盟が目指した「もう一つの日本」が目の見なかつたことを、このタイトルは伝えているのかもしれない。様々な失策が積み重なって奥羽越列藩同盟は敗れ去ってしまったが、それでも盟約にあるよ

うな崇高な精神は、なくならずに今の東北にも伝わり、受け継がれているようにも思う。

玉虫左太夫、本来は禁固7カ月で済むはずだったが、政敵によって切腹させられてしまった。もし本来の禁固だけで済んでいたら、仙台は、そして日本はどのよう

に変わったのだろうか。第14号で取り上げた会津の山本覚馬の業績を見ても、玉

虫左太夫ももし生きていたとしたら、相当のことを成し遂げたに違いないと思う。その山本覚馬と玉虫左太夫

がもし邂逅していたら、きっと意気投合して、相互に大いに刺激し合ったのではないか、なども夢想するのである。

なお、玉虫左太夫が遺した「航米日録」、7年前に「仙台藩士幕末世界一周」(荒蝦夷)というタイトルで玉虫左太夫の子孫である山本三郎氏の現代語訳で刊行されている。併せて読んでみたいものである。

この「航米日録」にも出てくるが、この世界一周の航海中に玉虫左太夫はビールを飲んでる。キリンビールのサイトに「ビールを愛した近代日本人」の中に玉虫左太夫も紹介されている。世界を目的の当たりにしながら飲むビールが、玉虫左太夫にとってどのような味だったのか、聞いてみたいものである。

執筆者紹介

大友浩平 (おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagnasi/



Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

東北に回帰する、 という事

さる二〇〇七年四月、私は約十五年住んだ東京から縁も知りもない仙台へ移住した。それから震災も経験しながら、十年と少しが経った事になる。

私の郷里は隣県山形の庄内地方であるが、庄内と仙台は朝日連峰と奥羽山脈に阻まれ、元来はあまり交流のない地域だ。二〇〇〇年代に入り高速バス交通網が東北各地に張られてようやく、庄内と仙台は近くなり、深い交流が持てるようになったのである。

私は東京に出て五年ほどすると様々な要因から東北



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出没し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

という土地を見直すようになり、今考えれば所謂「回帰」、再移住を考え始めていた。それも郷里の実家に戻る、という形ではなく新天地として東北の別の地域での生活を望み、郷土庄内との改善したアクセスや東北一の大都市とはどういう場所かという興味から、仙台への移住を決める。完全に郷里へ戻る訳ではない事で、ビジネス用語で言うところの「Jターン」の一種と言えるだろう。

ひとえに、「回帰」といっても様々な形がある。晩年になって郷里庄内以外の東北に関心を持ち、各地を旅した作家・藤沢周平のように、東京などに出て仕事と家族を持ち長年暮らし、昭和の世代にとつては、「回帰」とは精神的な軌跡であり、東北への「再移住」という形はほとんど現実的ではなかっただろう。それは平成の若い世代にとつても同様で、決して多数派の選択肢ではない。幸か不幸か、結婚もできず仕事も続かないような私だからこそ、一見非現実的な事を実行できた側面もあるのである。そのような私でさえ、友人などには止められたものだ。「田舎に帰るのは、年を取ってからでいいだろう。」

一旦大都市に出た若者はそこで「頑張る」ものであり、さもなければ「都落ち」だ、という観念が、今も根強く残っているという事だろう(だがそれが地方衰退の遠因でもある)。

私の意志も実のところ最初から固かった訳ではない。東北回帰が単なる憧れで、実は大都会に疲れただけで少し田舎の方へ移れば満足できるものではないかと思ひ、東京の西部郊外・小平市へ転居した。その結果、私の場合は東北移住の意志を固くしただけであつたが、身軽な独り暮らしの身であつても、心身ともに東北へ「回帰」するのは容易な事ではないのだ。

地方移住に際して最も気になる労働環境については、筆者は長く季節労働や肉体労働の現場を渡り歩くような生活をしているため、気候的な面での過酷さやクルマ通勤必須の職場が多いなどの不便さ、給与が地方では相対的に低い事などが特に実感できるのだが、仙台・宮城で感じる顕著な首都圏との違いといえば、雇用者側と従業員側との微妙な感情の応酬であろうか。

実は、宮城県は、「働くのは辛い事だと思ふ人が多くい県」ランキングで東北他県を抜き出でかなり上位である、過去の県民意識調査結果で見た事がある。自らの実体験から考えると、宮城県人も東北人として、震災時にも發揮されたように忍耐強さは持っているのだが、それに雇用者が付け込んで、あるいは「甘えて」無理をさせる。そして従業員は義理や人情も交えてがんばってしまう、という悪循環がある。極めて日本的な体質で、全国基本的に似たような事例はあるかも知れないが、首都圏のようには様々な地方の人が集まっていたり、言いたい事を言い合うような土地柄であれば、いい意味でもっとビジネスライクなのではないかと考えるのである。

ごく最近、Oターンという言葉が存在する事を知った。地方から大都会に出て、望んで地方に戻つたのに、あらためて地方の現実に絶望し再び大都会に向かう、という意味らしい。しかしこれはUターン・Iターンが一般的になってきた今、これもまた頻繁に見られるケースになってきた、という事だろう。これは昨今言われる地方創生だとか、地方の活性化を自論む動きからすれば究極的にネガティブな話だ。実際に仙台という大都市で暮らした私ですらその気持ちがわかつてしまふほどに、事態は深刻である気がしている。

仙台はもちろん、盛岡市や秋田市など地域の中心都市には東京が巨大化し分散化する事で失つた、中心性という安心感がある。行き交う見知らぬ人々とも、同じ街を共有しているという最低限の連帯感かも知れないし、自分の居住する地域が一個の完成された共同体である事への信頼感、といったものかも知れない。にもかかわらず、小さな村や町のみならず、仙台を始めとする東北の中核都市からすら尚人々が流出しその多くを東京へと向かわせるもの、つまり完結した循環装置として未だ致命的に欠けた要素があるのだ。

極端だが、もし東京が突然消滅したら、仙台・東北が困る事は何だろうか？

所謂頭脳労働などの職種の人や、映像や音楽などの趣味を持つ人の多くが持つ、共通の欲求が思い出される。「東京で一流の仕事がしたい」「もっと刺激的な現場や人々に接したい」

仙台に移住する前に住んだ小平市のような東京の中心部より外のエリアと、仙台市を比較すると、大きな差異がありながら、基本的なところでは共通した一面がある。それは例えば、オペラやバレエ、大きなコンサートなどのイベントの時は東京都心へ行く、という事例に代表される性格、「東京に行けばあるから、地元にはなくてもいい」という論理である。これは東京の内側でいえば、散在する高円寺や経堂などの町で、「新宿や渋谷にあるからここにはなくてもいい」というのと同じである。それら小さな町は、暮らしやすく一応生活に必要な物は手に入る反面、悪く言えば多くが中途半端である。近郊である杉並区や小平市などはともかく、仙台のような遠方地域の中心地でも同様の姿勢である事が望ましい事なのかどうか。

仙台はよく、東北他県の人から「発展していて羨ましい」と言われる。けれども、出身地にかかわらず住んでいる人々の口からは「まだ足りない。これで満足してはいけぬ。」

「仙台は方向性自体が間違っているのではないか。」という声が多く聞かれる。方向性というのは、発展する事と東京の真似をする事とは違うという意味だろう。地方都市が全て東京と同様の水準を持つ、などという事は甚だ非現実的と思われながらも知れない。しかし伊達政宗の築いた仙台を始め多くの城下町が、そもそも江戸なしでも全く問題のない都市だった事を思えば、その理念がむしろ本来のものであった事に気づかされるのではないか。

明治以降の仙台の発展の裏には中央政府、地元行政両者の思惑が絡み合っていた事だろう。中央にしてみれば東北を新生大日本帝国の北の要として確実に支配する必要があり、その点仙台は中央との接続もよく東北全体への視みを利かせるのに好都合であった。逆に仙台側からすればこの中央の思惑に便乗して発展し、東京に負けぬ都市になろうという政宗譲りの野望が見え隠れしていたかも知れない。

太宰治の小説『惜別』では、冒頭に明治期仙台市街の詳細な描写がある。「東一番丁の夜のにぎわいは格別」

「東京にあつて仙台にないものは市街鉄道くらい」「東京は後年空襲で焼失する前の仙台を实地取材しており、現在のそれとは明らかに異なる、北の都の活況

を描写きつている。当時はもちろんTVもなく最先端の情報や流行は東京などの大都市に集中・滞留していたが、全国の人々が東京を目指すような一極集中はまだ見られず、仙台のような都市のみならず各町村もそれぞれの文化と社会を保ち活気を持っていた。私の郷里・湯野浜温泉を例にとつても、明治から昭和中期にかけては映画館や路面電車まで備え、山中の中学校には交響楽団まであったという。私の時代にはその全てが失われており、既に時代は地方の衰退化に向かつていたのである。まさに、移動手段の発達で「ここになら、作ればいい」から「ここにないのなら、作ればいい」になる所に行けばいい」になつてしまひ、結果、ない所にはますますなくなつてしまふ悪循環が生まれてしまつたのである。

最近のU・Iターンの傾向として、田舎より都市部への移住が多くなつてきたという。多様な自治体と文化が存在する東北において、決して喜ばしい流れとは言えないが、あくまで東北への移住にこだわらうとしている人々がいる事を見逃してはならないだろう。「ほどほど都会の方がいい」と評価されてきた仙台も、単に「ほどほど」では済まなくなる可能性も考えられる。東京の真似ではなく、且つ東京がなくなつても問題ないほど高水準な、しかも東北ならではの世界を構築する事ができるか。無い者ねだりではなく遠望すべき理想に掲げ、私は何度でも東北に回帰したいと思つている。



昭和初期頃、湯野浜の活況(伝・筆者の祖父による撮影)



雪の狛犬



野生動物の痕跡



氏神



冬晴れの荒神様

北極圏を覆った大寒気団のおかげで、北半球が寒波に見舞われ、米国では凍ったワニの写真で大騒ぎだ。日本も寒波に襲われ、北海道から九州までの日本海側で大雪が降り、電車が十時間以上も立往生したところもあった。

シリーズ 遠野の自然 「遠野の小寒」 遠野 1000 景より

遠野は冬は厳しい寒さで有名であるが、そうしたニュースにすっかりかき消されてしまった。
*
今回は、冬本番を迎えた遠野のいくつかの風景写真を取り上げた。
雪の上に野生動物が歩いた足跡が点々と続く。何の足跡だろうか。
狛犬も雪まみれだ。氏神さまも雪の中だ。
地吹雪の写真は見ているだけでも、寒がりの筆者は身震いする。
晴れた日には、荒神さまも田んぼも澄み切った空気のなかできれいだ。
ツララはまだ小さい方が、火焔山のように赤く染まった六角牛山は美しい。



冬晴れの日



地吹雪」



ツララ



赤お六

ほや消費拡大運動のご紹介 冬でもほやを食べよう! 「ほや鍋具材4点セット」販売開始 宮城南三陸町の(株)ヤマウチ、(株) 及善商店、および公立大学法人宮城 大学のコラボ

(プレスリリース配信: @ Press より)

株式会社ヤマウチ(本社:宮城南三陸町、取締役:山内淳平、以下山内鮮魚店)、株式会社及善商店(本社:宮城南三陸町、専務取締役:及川善弥、以下及善蒲鉾店)、公立大学法人宮城大学(所在地:宮城県黒川郡、教授:藤原正樹、以下、藤原ゼミナール)の3者は、「ほや鍋具材4点セット」を共同で開発し、2018年1月10日(水)に山内鮮魚店が運営する、山内鮮魚オンラインショップにて、販売を開始いたしました。
(<http://www.yamauchi-f.com/>)

また、廃棄されている「ホヤ」の消費拡大に繋げるため、南三陸町内の飲食店でも「ほや鍋」の同時提供を開始いたします。

【ほや鍋開発エピソード】

株式会社ヤマウチでは震災後の「ホヤ大量廃棄」を受け、2013年よりホヤの消費拡大と可能性を広げたいとの思いで、「海鞘エール(ホヤの煮汁を使った発泡酒)」や、「ホヤの粉末を使ったポテトチップス」などの製品を開発してきた。その思いに共感した、宮城大学 藤原ゼミナールと南

三陸の株式会社及善商店の協力を得て、鍋具材として利用できる「蒸しホヤだんご」と「揚げホヤだんご」の開発と、それらを使った鍋のレシピ作りに着手。さまざまな試行錯誤と試食を重ね、全国のホヤファンに向け、ホヤの風味を存分に楽しめる、冬の「ほや鍋具材セット」を開発しました。

【宮城大学 事業構想学部 藤原 正樹研究室】からのコメント)

ホヤの現状を山内さんから聞いた時、ホヤ好きの私たちは驚きました。同時に私たちに何かできることはないかと考え、試行錯誤を繰り返してほや鍋の開発に至りました。刺身のイメージが強いホヤですが、「鍋」との相性は抜群で寒い冬にはぴったりです。この商品を通して今までホヤを食べることがなかった人にも虜になってもらいたいです。

■ほや鍋の味

かつお出汁をベースに、急速冷凍した「生のホヤ」や「殻付きの蒸しホヤ」、「ホヤ団子」といったホヤから出る濃厚な出汁味が特徴です。最後に残った汁で作る「おじや」もホヤの風味が格別。通常は夏が旬のホヤですが、さまざまな志向のホヤ製品を使うことで、冬でも美味しく楽しめる南三陸発の新しい鍋になっています。

■ほや鍋「具材」の特徴

【1】夏のホヤ(急速冷凍生ホヤ)
旬の生ホヤを剥き身に急速冷凍しました。お刺身で楽しめる鮮度のため、本場ならではの甘みがあり、食感も新鮮なホヤそのものです。

【2】ボイルホヤ(殻付き蒸しホヤ)

南三陸産の真ホヤを殻付きのまま蒸しているため、驚くほどジューシーな旨味の特徴。独特なクセが抜けても食べやすい味わいも特徴です。

【3】海鞘蒸し団子(ホヤむしだんご)

南三陸産の真ホヤをぎく切りにし、たつぷりと練り込んだ蒸しホヤ団子。ふっくらと仕上げた蒲鉾と、海鞘の相性は抜群です。

【4】海鞘揚げ団子(ホヤあげだんご)

南三陸産の真ホヤをぎく切りにし、たつぷりと練り込み、油で揚げた揚げホヤ団子。揚げかまぼこの甘みとゴロゴロと入ったホヤの風味が格別です。

